

東京工芸大学-色を記録する展-企画展展示解説とパネルディスカッションの会
—小西六本店六櫻社(現コニカミノルタ)が日本初開発の天然色印画とコニカラー映画の展
示を通してみる日本写真工業の歴史—

日本写真学会 100 周年

cololab



**東京工芸大学 カラボギャラリー第 10 回企画展 -色を記録する展-
企画展展示解説とパネルディスカッションの会**

—小西六本店六櫻社(現コニカミノルタ)が日本初開発の天然色印画とコニカラー映画の展
示を通してみる日本写真工業の歴史—

東京工芸大学 カラボギャラリー第 10 回企画展 -色を記録する展-

現代のカラーフィルムのような高度な多層塗布技術に支えられた製品ができる以前にも
白黒のネガフィルムを使った三色分解撮影と一色ずつ重ねて染色するダイトランスファー
プロセスやテクニカラー映画のような天然色写真、天然色映画は存在していました。また、
欧米の技術に比べてあまり知られていませんが、日本にも独自の天然色プロセスも存在し
ていました。

本展示は、写真材料商 小西六本店(後の小西六写真工業株式会社、現在のコニカミノルタ
株式会社)の製造部門、六櫻社の技師長でのちに本学教授となった江頭春樹の開発による「転
写現像紙」を利用した天然色印画と、小西六写真工業取締役の毛利廣雄らが開発したコニカ
ラー映画システムを紹介するものです。製作から 80 年余を経過しても、良好な色彩を保つ
小西六の天然色印画法を知るとは、小西六と関わりの深い東京工芸大学の建学の精神へ
の理解を深めるものであり、大学所蔵の豊富な写真資料を活用してこの展示を企画しまし
た。

展覧会ディレクター 矢島 仁 (芸術学部映像学科准教授)

色を記録する展企画展展示解説とパネルディスカッションの会

—小西六本店六櫻社(現コニカミノルタ)が日本初開発の天然色印画とコニカラー映画の展
示を通してみる日本写真工業の歴史—

【日 時】 2023 年 2 月 23 日 (木) 13:00~15:00

【定 員】 先着 50 名限定 (事前申込制)

【主 催】 (一社) 日本写真学会代表理事会、「写真好き」のための定期講演会実行委員会

【協 力】 東京工芸大学 色の国際科学芸術研究センター

【会 場】

展示会場：東京工芸大学 厚木キャンパス 12 号館 2 階カラボギャラリー

パネルディスカッション会場：東京工芸大学 厚木キャンパス 教室 (1111, 1112 教室)

〒243-0297 神奈川県厚木市飯山南 5-45-1

■ アクセス： <https://www.t-kougei.ac.jp/access/#atsugi>

※厚木から工芸大へは、バスをご利用下さい。車での来場は控えて下さい。

【参加資格】：日本写真学会会員限定：参加費無料

【プログラム】

1. 東京工芸大学 カラボギャラリー第10回企画展 -色を記録する展-の解説
矢島 仁（芸術学部映像学科准教授）
 2. 一第10回企画展 -色を記録する展-ギャラリートーク付き見学
 3. 「小西六本店(後の小西六写真工業、現コニカミノルタ)の天然色印画とコニカラー映画システムにおける国産写真開発の歩みと意義」パネルディスカッション
小西六開発内容とその意義、進行；矢島 仁（芸術学部映像学科准教授）
パネラー：飯島俊文氏（元コニカミノルタ銀塩感材開発）
パネラー；高田俊二氏（写真技術史、元富士フイルム）
- 「写真好き」のための定期講演会実行委員会
進行；山田勝実（写真学会副会長、東京工芸大工学部教授）
越地福朗（東京工芸大工学部准教授）



PDF 版チラシダウンロード

一第10回企画展 -色を記録する展— 展示作品

(1)コニカラー映画システムの特徴

展示 ■コニカラーカメラ三色分解映画撮影機

■KCC 400 型 401 号機(実物展示)

(2)コニカラー映画プリント

■カラーチャート (映画フィルム)

(3)映像作品

『コニカラー映画システム(三色分解撮影)』にて撮影された「可愛い魚屋さん」と「赤い陣羽織」の一部を上映

(4)「さくら三色用フキフィルム」開発の道のり

東京工芸大学に膨大な量の三色分解ネガが残されていましたが、あまりにも情報が欠けているものばかりでした。やがて写真雑誌の掲載写真と保管の原版が照合できたり、軍人や皇室関係などの写真から撮影日の特定できるものもあり、主に昭和初期の撮影であることが確認できました。

詳細を見ると分解ネガのフィルムの特徴と膜面方面の違いに気付き、さらにいくつかの色分解ネガをカラー合成してみたところ、保管されていた分解ネガは三色分解撮影を手軽に行うための

「さくら三色用フキフィルム」の開発にかかわるごく初期の撮影から、改良されて商品化した時点、そしてさらに改良が加わり完成の域に達したまでの全ての研究資料であるように思えてきました。江頭式とも称される六桜社式天然色印画の進化の道筋を展示写真でお確かめください。

展示 ■ 轉寫 (てんしゃ) 現像紙と色素液等当時使用されていた現像液など(写真)

作品 ■ 「エンゼル魚」(六桜社式天然色印画)

(5) Color Research Lab. / カラー・リサーチ・ラボ

色の国際科学芸術研究センターによる支援のもとで実施された多岐にわたる「色」に関する研究成果展示

<コニカ- Wikipedia> より抜粋

写真用フィルム[編集]

杉浦六三郎(のちの 6 代目杉浦六右衛門)が 1873 年(明治 6 年)、東京麹町で薬種問屋小西屋六兵衛店を立ち上げ、写真関係商品や石版印刷材料の販売を開始したことに始まり、のちに小西六写真工業株式会社へと発展し、1903 年(明治 36 年)に国産初の印画紙を発売した。

小西六写真工業は日本の写真用カメラフィルムのトップブランドの 1 つとして成長し、戦後の国内シェアは、さくらカラー(のち「サクラカラー」に変更)が富士写真フイルム(現:富士フイルムホールディングス)のフジカラーを圧倒する状態が続いた。しかし 1970 年代に入ると、圧倒的な広告費を投入して知名度を向上させたフジカラーがシェアを逆転した。サクラカラーはその後、コニカカラー、コニカミノルタカラーフィルムを経て事業撤退するまでの間、ついに首位の座を奪いかえすことはできなかった。

1987 年に日本以外で使用していたブランド名「コニカ」に国内でも統一し、社名もコニカに変更。フィルムの商標もサクラカラーからコニカカラーに変更した。この際にコーポレートカラーを赤色(朱色)から青色(コニカブルー)に変更している。

2006 年、写真フィルム・レンズ付きフィルム・感材(印画紙・薬品)を含めた DPE 分野の事業を大日本印刷(DNP)に譲渡して撤退し、コニカブランドのフィルムは事実上消滅した。その後 2009 年に DNP も生産を打ち切ったため、完全にフィルム製造およびフィルム販売事業から撤退した。

六桜社[編集]

小西屋六兵衛店は 1902 年(明治 35 年)、写真乾板・印画紙の工場として六桜社(六桜社、ろくおうしゃ)を東京・淀橋(現:東京都新宿区西新宿)に開設した^[1]。新宿の工場は 1963 年(昭和 38 年)まで操業し^[1]、新宿副都心開発により閉鎖。現在は新宿中央公園の「区民の森」となっており「写真工業発祥の地」の記念碑が建てられている^{[1][4]}。2011 年には「六桜社跡」として新宿区の地域文化財(都市・産業分野、歴史分野)にも認定された^[1]。

株式会社小西六となった後の 1938 年(昭和 12 年)、東京府北多摩郡日野町(現:東京都日野市)に六桜社の工場を開設^[3]。これが現在のコニカミノルタ東京サイト日野(旧:日野事業所)^[5]である^[3]。六桜社は 1940 年(昭和 15 年)11 月 3 日、国産初のカラーフィルムであるさくら天然色フキフィルム(後のサクラカラーリバーサル)を発表。日野の工場ですくら天然色フキフィルムを生産していたことにちなみ、「国産初のカラーフィルム発祥の地^[3]」として日野市さくら町と命名された^[3]。同社日野グラウンドには桜の木が植えられ、現在でも毎年春に「コニカミノルタさくらまつり」を開催して地域住民との交流を深めている^[3]。

映画用フィルム[編集]

コニカは銀塩フィルムの最大手として、映画用フィルムの製造も手がけた。

かつてカラー映画用フィルムはテクニカラー(TECHNICOLOR)・システムという方式が世界の主流であった(現在も著名)。これはプリズム分解式のカメラで 3 原色ごとに 3 本のモノクロフィルムを使って撮影し、プリントの段階でカラー化するという、後のテレビカメラに通じる方式だが、フィルムのコストとプリント工程が増加するという欠点もあった。

これに対し、1942 年に小西六はフィルムの記録面を 3 層にし、1 本のフィルムを 3 工程で現像することによりカラー化する「コニカラー・システム」を開発した。当時にとっては画期的なシステムだったが、時局柄世界に広まることはなかった。しかし日本映画界には歓迎され、映画界と 2 つの車輪となってシステムの完成に尽力した。

しかし 1951 年に富士写真フイルムが 1 本のフィルム・1 工程現像の映画用カラーリバーサルフイルムを発売したことで、コニカラー・システムの優位性は覆されてしまい、以降コダックと富士フイルムの世界を二分する商戦の中で埋没していくことになる。

家庭用を主体とする 8 ミリフイルムでは、富士フイルムとの対立から当初コダックの「スーパー 8」陣営についた。「世界で通用するコニカのスーパー 8」をキャッチコピーに拡販を狙ったが、スーパー 8 に因縁のある富士フイルムの「シングル 8」の徹底した世界展開により優位性は得られなかった。